

V モグラの造反

1

新設子会社「常磐開発」は資本金一億で、親会社からの移籍職員は四百名である。

開削部は立坑開削係と坑道掘進係に分かれ、部長以下わずか一五名にすぎない。私は立坑開削係長の辞令を貰ったが、部下は星野という事務兼資材係員一人だけで、兵隊は皆無である。三交代係員がそのまま残ったが、彼らの籍は親会社にある。つまり借りもので、なんとも見すほらしい係長である。

渡辺が開削課副課長になった。課長が定年目前の実地あがりとあって、万更でもない様子である。一人有^っ封^{けい}に入っていたのは、坑道掘進係長の林だ。佐々木と同期入社^りの仙台工専卒で、高慢ちきのおべんちゃらで通っている。早くもポスト佐々木と任じて、しきりに私を牽制^{けんせい}^しだした。

佐藤剛三の、厳しい顔付きが特に印象的だった。彼は立坑を離れて機材係長心得になったが、そんな子供^こだましの辞令には目もくれなかった。取りつく島もない険しい表情で、必死で何かに耐え、何かと闘い、あるいは何かを模索^{もさく}しているやに見えた。

常磐炭砒^いの多角経営も緒^{いと}についたばかりで、一般従業員の認識は単なる口減らしという域を出ていない。言わば子会社への出向は、島流しも同然と見られていた。社宅の女房族に至っては口さがない以上

に浅はかで、出向者ばかりかその家族まで、落伍者のように蔑んだり差別していたのである。

親会社は、ゆくゆくは常盤開発を系列グループの中核企業たらしめると謳いあげたが、踊る者はいない。誰もが自分の殻に籠って身の不運を嘆くか途方に暮れ、なんともばらばらで湿っぽい滑りだしとなつた。

新会社発足の夜、部長の矢部が、開削部スタッフの顔合わせを内郷の料亭に設営した。

スタッフと言つても、渡辺と林、それに私の三人で、課長は早くも蚊帳の外だ。ひっそりとして、なんとも寂しい限りである。

その席上、部長が刷りあがったばかりの名刺をケースごと放りだし、「こんな事であるか」と、大粒の涙をぼろぼろこぼした。

矢部は、東部磁長の山田と並んで出世コースのトップを走っていた西部磁の磁長で、やはり東大卒のエリートである。だが、学歴と閥の強みを利してぐいぐい押しまくる山田に比べれば、多分に坊ちゃん型のロマンチストで、学歴だけにおんぶして安閑と構えていたきらいがある。トップ争いでは、どう見ても山田に歩があるというのが、衆目の一致するところだったのである。

それにしても、取締役部長と肩書きは聞こえはいいものの、言ってみれば新興土建屋の親方にすぎない。ヤマの権力を象徴するような磁長の座からの急転落は、本人ならずとも身につまされる。

だからと言って、いきなり大泣きに泣かれたのでは面食らってしまうばかりだ。

渡辺と林が、慌てて両側からなだめた。

特に林などは、「私らがそばにおります。私がどこまでもついていきますから……」と、早くも「股肱の臣」気取りで、歯の浮くようなお世辞を並べだした。

そうなると思んだ愁嘆場、私はいっぺんで白けてしまい、酒もまずくなった。

元磁長殿狂乱……!?

心中は察してあまりあるが、その泣きの涙に常磐の企業合理化の底の浅さと、子会社の悲哀がすべて凝縮されていた。また、東大出の知性や教養の底も割れた形だが、そんなものを鈍化させ、すり減らしてしまふヤマの閉鎖性や陰険性が、あらためて浮き彫りになった。

部長殿には悪いが、彼の狂態で私の中の何かがはじけ、それとともにうっ屈していたものが腰を切つて流れ出していった。

2

水没した湯長谷立坑は、試錐一筋三十年という最長老係員の絶妙な経験技術に救われ、辛うじて最悪事態を免れることができた。

彼にとっては、吊り下ろした150メートルものボーリングロッド（ロッド一本の長さは3メートル）の先端までが、自分の手指のようだった。その指先の微妙な感触を慈しむかのように、そろりそろりとロッドを上下左右に動かしながら、ついにケーシングパイプの頭部を捕捉したのである。

彼は私を見あげ、ニヤリと快心の笑みを洩らした。私は嬉しさに、身震いした。

続いてゆるゆるとロッドを送りこんだかと思うと、「抜けたアッ」と、彼が顔を引き吊らせて叫んだ。一瞬、異常な水圧によって、ロッドが抜き差ししならなくなった。顔を引き締めて、彼はロッドをホールダーで固定した。

すかさず私は、彼に握手を求めた。

このごつい掌に救われたんだと思うと感激もひとしお、そのたくましい感触と快心の笑みが、後々まで忘れられないものになった。

下請業者の選定に時間がかかり、十一月半ばすぎ、やっと工事再開の運びとなった。

業者は札幌に本社を置く「北新工業」で、道内各炭砦に手広く実績を持つ立坑専業者である。

炭坑の外註工事の窓口は砦業所砦務部の事務係で、砦業所長の懐刀と言われる事務係長が一手に掌握していた。係長ながら、砦長や部長クラスも一目を置くほどの陰の権力者である。部下の女事務員を愛人同然にしているが、誰もそれに触れる者がいない。その係長と渡辺は、親の代から昵懇の間柄である。

下請契約はすべてその両者で進められ、私は蚊帳の外に置かれていた。そればかりか、契約後も金銭的部分については何も知らされていない。それを知られたら自分の立場も旨味もなくなるとでも思うのか、渡辺はすっかりガードを固くしてもっぱら銭勘定だ。私はうんざりして、聞く気にもなれなかった。

北新工業は、社内随一の遣り手という荒木を所長として送りこんできた。渡辺と同じ大正十三年生まれで、でっぷりとした赤ら顔の大男である。土木屋特有の泥臭いにおいをぶんぶんさせながら、開口一

番、「私が陣頭指揮しますよって、一切、お任せ下さい」と、自信満々に言い切った。

彼は、北海道から二人の若い学卒係員と、六人の子飼いの坑夫を連れてきた。不足分は現地調達という訳で、これも現地採用の労務世話役が閉山炭坑を飛び回り、手当たり次第に溢れ坑夫を掻き集めてきた。

そのうちには員数揃えに窮して、ほまち稼ぎの百姓や、遠洋漁業に行きそびれた漁師あがりまで拾ってきた。また、明らかに与太者と分かる遊び人も交じれば、ついには札つきの暴走族まで誘ってきたのである。

北新工業は、坑内夫と坑外間接夫（機械運転手や信号手も含む）など、純然たる労務請負で、資材や機械は元請けの負担である。下請けの労務配充が円滑に進まないと、元請け側の機械経費や人件費はふくらむばかりだ。

北新の人集めは、一向に捗らなかつた。

ピック掘り手積みひつかたの常磐式工法での一方当たりの最適人員は、経験的に十人弱と割りだされていた。

つまり三交代で三十人以上の坑内夫の確保を要請していたが、荒木は労務調達や出稼督励しゅっかの困難性をことさら強調して、人間の質も員数も全く半端なままでもっぱら時間稼ぎをしていた。三、四人しか入坑しないことも珍しくなく、ひどいときは一人、二人という場合もあったのである。

それでも荒木は悪びれることがなく、渡辺を相手に事務所でおだをあげていた。

渡辺も、仕事は私任せの立坑は居心地がよいのか、そのまま居据わって本部に机を移そうともしない。夜には、荒木とちよくちよく飲み歩いているようだった。

荒木は渡辺を自家薬籠中のものとしておけば安泰と思うのか、私など眼中にない。

荒木が言う陣頭指揮とは、いわゆる「親方の一時力」だった。つまりほんのいつときだけ馬鹿力を見せつけて、部下をなびかせようとする遣り方だ。さりげない一時力に、人間の心を根こそぎ収奪する偽善も陥穽も隠されている。私が自分に最も戒めていたことだが、荒木の場合は元請けに対する点数稼ぎも多分にあつて、特に渡辺の前ではそれこそ逼真的な馬鹿力を発揮するのである。

しかし、そのあたりは寄せ集めのすれっからし坑夫たちもよく見抜いていて、たやすくは荒木の思い通りにはならない。逆に一癖も二癖もあるばらばらな個性が、押し合いへし合いして荒木に揺さぶりをかけ、現場の安全管理もままならなくなってきた。

権力者の紐つき業者ほど扱い難いものはない。まして上司が業者べったりだと、現場施工の直接担当者、強いように弱い元請け、弱いように強い下請け、という倒錯関係に身をよじる。その心境は、ただただ痛恨の一語に尽きるのである。

師走半ば、業を煮やした私は、渡辺の面前で初めて荒木をどやしつけた。

「人集めに手間暇かかんのは百も承知だが、嘘八百並べんのもいい加減にしてくれ。どだい俺は、だからでれでれすんのも、されんのも嫌えなたちだ。いったい、あんたには、やる気があんのか、ねえのか？」

私は、反古も同然な労務配充予定表の束を荒木に突きつけ、態度も口調もがらりと崩して彼をどなりつけた。眼もつけた。

体は渡辺の方に向けたまま、赤ら顔のニキビ面だけ私に向けて椅子に踏んぞり返っていた荒木が、びっくりして居ずまいを直した。

「言っておくが、ここは北海道じゃあねえ。常磐のヤマや水は、そんなに生っ白くはねえんだよ。こんなザマでは、とてもじゃねえが、危く見てられねえ。あなたの陣頭指揮とやらも、とっくり拝ませてもらったことだし、今度はこっちの手並みをたっぶりお見せしよう。なんなら、あんたはもう坑内にもぐらんでいい。あとは全部、こっちの流儀でやらせてもらうから、そのつもりでいてくんない」

もはや荒木は、直立不動の姿勢だった。

「とにかく、あなたの能書きは聞き飽きた。こんな所で油を売ってねで、もちょっとましな兵隊集めに走ったらどうなんだ。所長さんだらう。所長さんなら所長さんらしく、ちゃんとやって貰おうじゃねえか、え……!？」

「ハイッ、分かりました！」

荒木が、巨体を軍隊式に折り曲げていた。

そのまま彼は事務所をあたふたと飛びだしたが、渡辺は腕組みをしたまま、むっつりとして渋い面を天井に向けていた。

(そんな面は、あいつにこそ必要なんだ)

私は自席で、ターザンの大あくびをした。

ジャングルのターザンのような咆哮をあげるのが癖で、みっともないから人前ではしないでと妻にたしなめられていたものである。

うっ憤を一気にぶちまけたこともあるが、それはとりもなおさず新生面開拓の、心機一転の号砲でもあったのである。

私はこの目を境に、仕事の鬼になった。

元請けの立場を超え、また渡辺や荒木も無視して直接工事に介入、下請けの係員や組夫を我が物として采配したのである。

すでに白坂貞岩層に入って新たな湧水はないが、上方の築壁面の段差からの滴水が雨のように降っている。その効率的な排水方法とケーシングパイプの保護対策を、まず徹底的に反覆指導した。

なにしろ彼らには、地の底という恐怖観念はあっても、目に見えない茫莫たる地中湖の底にいたという意識がない。それが怖くて、口を開けば、「水、水、水!! 水が立坑ではいちばん怖い、ヤマより怖い」と言っていて、危機意識や問題意識を絶えず喚起した。

掘進作業の場合は中央掘り下げを先行させるが、それ以前にケーシングパイプ周囲の排水バックの掘り下げが先決となる。すり鉢状に掘り下げる気骨の折れる掘削で誰も敬遠するが、私はピック使いからズリのすくいあげまで率先垂範して教えこんだ。

大型ドリル改良型のピックは、重量が22キロもある。それを私は自分の腕のように使いこなせるばか

りでなく、いったん手にすると楽しくさえなって放せなくなる。またスコップも左右使いはおろか、ズリをすくって頭ごしに真後ろのキブルに放りこめるぐらいに手になじんでいた。つまり並みの坑夫以上に坑夫な訳で、坑内の肉体労働が少しも苦にならなかったのである。

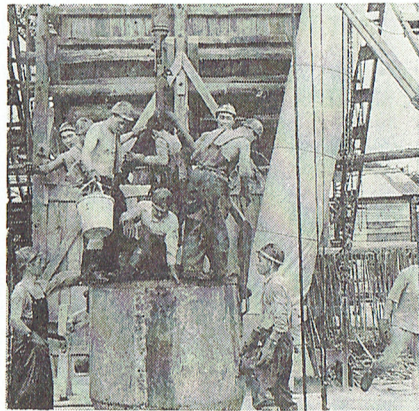
掘進や築壁の主体作業以上に、立坑ではスカフォードやキブルでの宙吊り作業が多く、危険に対処する動物的な反射神経や平衡感覚が保安上必須となる。私はそれら付帯作業のすべてについて我流を押しつけ、私のように動き私のような身のこなしをすれば、立坑も危くないと叩きこんだ。つまり、何も彼

も私の色一色に染めあげたのである。

組夫らの目付きが、俄に変わってきた。

身の安全はもちろん、私に見習えば、確実に稼ぎが良くなると悟ったのだろう。何より彼らの場合は日々生活に直結する請負い仕事で、出来高があがるなら猫の手も借りたい訳である。そのため私が彼らの中に割り込んでいくと、無二の助っ人が来たとばかりニンマリして、猛然と発奮したのである。

そうなると彼らの間には、労組ごとき人間疎外の壁もなければ、言葉をえらぶ必要もない。柄や口は



やれやれ終わった。ギブスから飛び降りる坑夫たち

恐しく悪いが、そこは私も育ちが育ち、彼らが私に懐き、私が彼らの餓鬼大将になるのにさして時間はかからなかった。

期せずして、腹藏もない、実にしっとりとした人間関係が組夫らとの間に芽生えた。

それは元請け三交代係員にも通じていて、碓員らにいいように牛耳られていた彼らが別人のように闊達になり、それこそ親身になって組夫らに加勢した。地声も出れば笑顔も戻った。まさに人間復活の証である。

気持ちを通じ合う人間たちと汗を流して、キブルにすし詰めになって昇坑するときの気分は、実に爽快でこたえられない。

真っ暗闇の風と雨を切り、キブルがぐんぐんはずみをつけてせりあがっていく。その中で充実感と解放感を、誰もがじっくり噛みしめながら身を任せている。同乗者の表情は闇で窺うべくもないが、闇だからこそ傍への慈しみや労りなど、ほのぼのとした人間的共感がふんわかと湧いてくるのである。

もはや、元請けも下請けもない。上下の隔りもない。渾然一体となって掘り進んだ。

荒木だけが土俵の外で、少なくとも現場ではすっかり影がうすくなってしまった。彼の係員らも私寄り、何も彼も勉強になると喜んでびったりとついてきたのである。

彼は生っ粋の土木屋で、土木的センスやキャリアを誇示、あたかも後進国の開発指導に乗り込んできたような当たるべからざると迫力があつた。また、弁説も巧みだった。

北海道では通じたのだろうか、どっこい、常磐のモグラははったりがきく相手ではない。まして立坑

に関する限り、常磐は独自の伝統的技術を誇っていたのである。先人たちが築いた城をみすみす土足で汚されてたまるかと、私も意地になった部分がかなりあつた。

荒木も形無しだが、実績はうなぎのぼりだからほくほくだ。算盤勘定にも合うと割り切つて、唯々諾々と私のペースに追従する一方では、昼も夜も渡辺のご気嫌とりに余念なかつたのである。

3

明けて昭和三十六年、立坑の急速施工が優先課題として急浮上してきた。坑内温度の引き下げによる労働条件の改善が合理化には急務だと、年頭早々から労組が会社に圧力をかけたのである。

労組も虫がよすぎる。身内の組合員なら、そうもやいのやいのと急かすまい。

俄に、碓業所長の夜間巡視が多くなった。

彼の夜討ち朝駆けはつとに有名で、現場担当者を戦々競々とさせていた。貧乏症とか仕事熱心とか人は言うが、私にはそれも「親方の一時力」の類いとしか受け取れない。狙われる側にすれば実に疎ましいものである。

いつも遠くで車を乗り捨て、一人こっそり現場に入りこんでくるのである。そして現場の粗探しをして、指摘事項を書き残していくか、翌日関係上司に注意する。勤務外だからと言っても、留守にのぞかれるのは気色が悪いもので、自宅で夜もおちおちできない。

だが私は、師走から昼夜の別なく下請けの指導に熱中していた。また事故が怖くて、気になると夜中

でも自転車で駆けつけて、朝まで事務所に詰めていた。立坑槽を眺めているだけでも、気が落ちつくのである。

磁業所長と子会社の下っ端^{くだ}では馬が合うはずがないが、どういう訳か所長の気紛れなのぞきと、私の夜間出勤は不思議なほど波長が合って、ことごとく立坑事務所で鉢合わせして所長につけ入る隙を与えなかった。

所長は、そのたび私に聞いてきた。

「どうだ、湧水量は……。そうか、さっぱり減ってねえか。いったい、水源池はどこなんかなあ……。あっちの山か、それともあそこ沢かなあ……。野木君、おめえはどう思う？」

そう言われたって、答えようがない。

恐らく立坑なんか、巨大な地下水槽の中では、針の太さで立ち泳ぎしているようなものだろう。湧水量の毎分48立方呎だって、鬼の涙のひと雫でしかないような気がする。

毎度、地下水の動態について、そんなとりとめない禅問答が繰り返されたのである。

話のしまいは、いつも決まって、

「こんだけ、けちのついた立坑もねえ。一日も早く仕上げてくれ。いいか、頼んだぞ」

と言いつ捨て、そそくさと闇に消えていく。

（早く結着^{けり}をつけたいののはこっちの方。そもそも、労使トップのなれ合いがけちのつき初め。おかげでこっちはこんな尻ぬぐい……）

私はいつもそんな憎まれ口を、せかせか歩き去る所長の背中に叩きつけていた。

一月も末の夜半、また所長が現れた。

「だいぶ実績が上がってるそうだな。北新の所長は若いそうだが、なかなかの遣り手だそうじゃねえか。やはり、請負師は違うなあ」

いつもと違って、最初から下請け礼讃だ。

お前も見習えと言わんばかりである。

誰が下請けの荒木の売り込みをやり、誰が磁業所長に報告しているかおおよそ想像がつく。だが、それをとにかくけちをつければ、逆恨みやしっぺがえしが怖い。私は否定も肯定もせず、はあと、気のない返事をした。

すると所長は、住友建設の所長を引き合いにだして、私の対抗心を煽りだした。

「ま、向こうにはとても敵^{かた}うめえが、負けん気でやってくれたらいい。それで記録でも出たら、芸者をあげて飲ますがなあ……」

「……………!?!」

記録……………!?! 芸者……………!?! 酒……………!?!

たちまち私は、目を剥いた。

所長は私の反応を見るや、にやりと笑って背を向け、せかせかと闇に姿を消した。

出来っこねえだろうがな、と嘲笑われたようでもあった。さっと頭に血がのぼった。
(よし、そんなら、やってやる！)

私は、所長の背中に啖呵を切った。

記録への挑戦……。それは望むところだ。

住友建設と鹿島第二立坑——。それは言わばライバル。とりもなおさず、機械化—東部破々長—佐々木、という線につながる。

それらを絶えず意識していたからこそ、私は下請けの特訓に熱中していたのである。世はあげて機械化、機械化の大合唱だ。

全国の大手炭鉱もそれに起死回生の望みを托し、蒼皇として大量生産大量消費型のハードな技術革新に追随していた。設備投資の過熱ぶりは異常でさえあり、技術専門誌はそれら特集記事や記録的な成果発表で埋め尽くされていた。立坑部門でも、統制計画経済下のソ連の立坑技術の紹介や、けたはずれの記録が大々的に喧伝されていたのである。

従来、危険性と困難性から記録挑戦には消極的だった立坑関係者も、俄然熱をあげた。例年、全国立坑の実績が集約され、そのランクづけが関心の的になっていたのである。

ちなみに立坑の公式記録は、掘進と築壁メートルを合算して二分したメートル数で競っている。

本来は全工期を通じての「月間平均」を重視すべきだが、大勢はどうしても突出的な「月間最高」記録を競合しがちである。

当時、全国の月間平均は30メートル台で、その点、佐々木が持つ月間平均38メートル、月間最高48メートルはトップクラスだったのである。

そしていよいよ、鹿島第二立坑では、伝統的な常磐式工法に見切りをつけ、発破工法と機械積みを導入して記録合戦に参入していた。

住友の所長は役員待遇の大物所長で、立坑の事なら何でも彼に相談しろというほど、常磐の技術上層部が傾倒していた。湯長谷の崩落事故の場合でもそれが明らかだ。

それにしても東部破々長らは、いともあっさり常磐式工法を見捨てたものである。

ピット掘り手積みはいかにも原始的だが、伝統的にこだわってきた技術的理由や経済的合理性が幾つもあるのである。いくら機械化時代とはいえ、その能力限界をきわめもしないで無雑作に捨てるのは、いささか軽率で、技術的節操に欠けるのではないか。

私にすれば、人間そのものがほいされてしまったような気がしてならない。

そして破業所長の使噺的な笑いは、常磐式工法への悔蔑にも通じていた。

私も嘲笑された。

(売られた喧嘩なら、買わずばなるまい)

私は記録づくりに、ひたと照準を据えた。

ときに組夫らは、耳を聳すばかりの機械騒音の中でも、私の身振りや手振り、また顔色一つで一糸乱れず動くようになった。いうならば阿吽の呼吸、記録挑戦には必須なチームワークが見事に整ったので

ある。

常磐式工法は、なんと言っても人間が主軸である。ヤマと人間、水と人間、機械と人間、はたまた人間と人間の絡み合いの中で、少しでも異和感があったり隙間風があつては大事は成就できない。それを踏まえたうえで、無理なく無駄なくむらもなくという基本原則に立てば、古色蒼然たる常磐式工法にもなお十分勝算ありと私は呪んだ。

二月を準備月間として立坑の全機能と全職種について再整備、私はひそかに記録への環境づくりを拍車かけた。測量係や機電係など、親会社担当の定期作業にも時間的な注文をつけ、分刻みの時間管理網と協力体制を根気よく作りあげていったのである。

組夫らには食うために働くという単純明快なひたむきさがあり、時間とも競争しているくらいだから労働の質に申し分ない。ただ出稼しゅかを促す彼らの生活環境が不透明で、把握も管理もできない。それが最大の泣き所だったが、立坑をあげての彼らへの支援体制が整うと、知ってか知らずかおのずと出稼しゅかにめりはりがついて安定してきた。

三月一日の未明、私は坑口四周の地面に一升びんの酒をそつと吸わせ、片手拝みで、部下たちと急速施工の無事を祈った。

崩落事故から満一年、因縁の月だった。

壁の黒い染みは、いままも消えずにぬめぬめしているのだろう。罹災者かばかりか、立坑そのものも置き

去りにした不実な人間たちは既にいないが、水没事故を思うと、なおその辺に人間不信の呪い、がもやっているような気がしてならなかったのである。

そうだとしても顔触れは一新して、組夫らには関係もなければ咎とがも罪もないのである。

(彼らは最も人間らしい人間たち。言わばこれはあんたの弔い合戦。どうか、そつと見守っていて欲しい。頼みます、拝みます)

赦しも理解も求める切ない祈りになった。

4

初日が肝心と、私は満杯の一番方の入坑キブルに割り込んだ。組夫は七人である。

「あれえ係長、今日は早いお出ましで……」

先山の猪俣いのまたが、素っ頓狂な声をあげた。

「ン、今日はお前の後山めえだ。宜敷く頼んま」

私が言うと、すかさず小野寺係員が、

「みる、尻に火がつくぞ。観念すんだな」

と、猪俣を冷やかした。

小野寺は世話好きな最古参係員で、若い下請係員の及川と好コンビだ。猪俣は腕力随一の巨漢だが、飲ん兵衛で休みが多い。

入坑前は賑やかだが、いったん坑口扉が閉じてキブルが闇に呑まれると、みんな口を閉じて貝になる。あとは何も彼もそれぞれの胸に叩みこんで、身じろぎもしない。息さえひそめているが、誰のとも分からぬニンニクのおいがぶらんと漂うのも朝の入坑キブルではいつものことだった。

崩落区間を過ぎるころ、キブルはぐらんとはずみをつけて全速運転に入った。私はちょっと身じろぎして、片手を胸に当てた。

坑底深度は260メートル、区切りよく新階段の掘進からスタートである。

私の頭には、1階梯20メートルを掘進7日、築壁3日、計十日ですます周期計画が詰まっている。月内には3階梯を消化する予定だが、もちろん、計画や数字は秘中の秘だ。

機械化全盛時代に、重装備の国立坑と素手で張り合うのである。名乗りをあげるのも口幅つたいが、チームワークから施工の端々まですべて手作りの記録挑戦なのである。

私は一切の外部干渉を避けるため、渡辺にも無断でこの日にのぞんだのである。

キブルが坑底に到達すると、たちまちピックの轟音が坑内を圧した。

私は、腕力に任せて中央掘り下げの先陣を切る猪俣の脊中を小突き、「お前はこっち」と、ケーシングパイプのそばに呼びこんで排水バックを掘らせた。私は、もっぱらスコップで、彼が掘り起こすズリを捌いた。

猪俣のピック使いは大砲のように威勢がいいが、すぐ尻すぼみに深くなるバック掘りでは、たちまち息を切らし始めた。

ころやよしと、私は彼のピックを奪った。手狭な空間では岩盤の節理に応じながら、こまめにピックを操作するのがなにより効果的だ。猪俣のが大砲なら私は軽機関銃、縦横無尽にピックを駆使して、みるみる1・5メートルほどの排水バックを掘りあげてしまった。

(うへえっ、そんなに掘り下げんの!?)

猪俣が目を見張る以上に、係員や他の組夫らが度肝を抜かれたようだった。

私には、それも計算の内だ。一方(八時間一方は一番方、二番方、三番方などを言う)当たり1・5メートル、一日三交代で4・5メートルくらいの掘進は、捲き上げ能力からみて十分に可能なのである。要はズリ積み時間の短縮で、そのため私は、猫も杓子も、先山も係員もズリ積みの輪に入れと言いつつ、まず全員参加のズリ積みを定着させていたのである。

バックを掘りあげたあとは、早速、私が先山となってピックも振りかざせば、誰よりも巧みにスコップを使ってズリ積みもした。

初めは半信半疑でついできた組夫らも、いつしか私のペースに完全に合い乗りして、仕事の流れが実にリズムカルになっていった。

そしてついに初日の一番方で、1・3メートルという記録的な数字が生まれたのである。

その数字に、入坑してきた二番方が目を丸くした。係員は元請側が箱崎という准員で、下請は閉山炭坑出身で現地採用の磯係員。

組夫の中では最年長の木村喜弥太が、

「一番方はよ、係長が助けてくれっからな。俺らは負けるよなあ。出せっこねえよなあ」と、恨めしげに大愚痴をこぼした。

小名浜からバイクで通う村訥な岩手人で、元はトンネル専門の渡り坑夫だった。きまじめで貧乏性の小男だが、段取り捌きもうまければ人扱いもそつがない先山である。

木村にそうしょげこまれたのでは、見捨てて昇坑する訳にはいかなかった。

私はそのまま坑底に残り、またピックを掴んでバック掘りに熱中した。木村が、得たりや応と、私の後ろでズリを捌きだした。

まんまと、木村に乘せられてしまった。

彼の忙しいスコップ使いに急ぎ立てられて、三時間も付き合ってしまったのである。

もうよかっべと、私がピックを放すと、

「どうも、どうも……。どうもね」

と言って、木村が最敬礼した。

全く、憎めない相手である。

キブルに飛び乗ると、磯係員以下二番方の全員が、手を休めてひょこつと会釈した。

坑外は、すっかり日が暮れていた。

先山になったり後山になったり、組夫ら以上に体を使った一日だったが、我から好んでしたことで疲

れはさほど感じない。むしろ手ごたえが十分で、心地よい充足感でうっとりさえしてくる。机に足を投げだして立坑槽を見やれば、槽頂車の回転やロープの動きはスムーズ、主捲きドラムの回転音やモーターの唸りも、坑底の熱気を伝えるかのようにリズムミカルで威勢がいい。

(このまま、このまま。この調子でずつと……)

悪い行儀で、櫓に片手拝みした。

私は連日、排水バックを掘り続けた。

無難に予定を消化するには一方八人の常時出稼が望ましいが、絶対数が不足なうえ、組夫の出勤率はど当てにならないものはない。私は夜も随時出動して、員数の穴を埋めた。

自分で不思議に思うほど、疲れというものを知らなかった。全く疲れないという訳ではなく、いっとき休みをとれば、きれいさっぱり疲れが拭い去られている。まるで何かが乗り移ったように超人的にさえなっていた。また、いくら続けても倦むということがなかったのである。

工事は我ながら驚くほど順調に進んだ。

ワンサイクルを九日ですまし、十八日めには二階梯、つまり40メートルを軽く消化した。

そうなれば、周囲が気づかない訳はない。

まず、常駐の親会社の測量係員らが、

「このぶんでは大記録。狙ってたんですね」

と、探りを入れてきた。

私は「そんな気はねえよ」と、素っ惚けたが、相手はもう聞くものではない。わが事のように出稼や出来高にこだわり、彼らなりに勝手に秒読みを始めたのである。

係員たちばかりか組夫らまでが目の色をかえて、数字を気にしだした。木村などは、「係長、なんぼやればいいの、なんぼで？」

と、言っている顔をのぞき込んできた。

「成り行き次第だ。そう気にすんな」

私は笑い飛ばしてお茶を濁したが、言わず語らず彼らは私のオーダーラインを読みとったようだ。申し合わせたように、びたりと出足が揃ったばかりか、自発的に彼岸休日の返上まで申しでてきたのである。

俄然、立坑全体に緊迫感が漲りだした。

坑内ばかりか坑外の職工まで色めいて、各番方の出来高競争に肩を入れたしてきた。

私も我もと、ゴールに向かって一斉に駆けだしたようでもあり、ともすれば私の方が浮き足立ち、体が宙にふわりと浮く感じにもなってきたのである。

そうなる怖いのは、気負いすぎや浮かれすぎの事故だ。ゴール近くなるにつれ私は、いまにも何か起こりそうな強迫観念にとりつかれて、夜もろくに眠れなくなった。

苦しみにも似たその強迫観念は、はからずも一年前の釣り天井の下で味わったものと同じだった。

これもあの黒い染みがらみの因縁かと、苦しまぎれに一夜、町の路地裏の酒場で自分の小心を呪いながらしたたかに泥酔した。そんな突然の惑乱は、妻と子供たちしか知らない。

『思いも寄らず業苦にも似た生みの苦しさを一身に背負いこんだが、それは組夫らには関係もない。彼らは意気軒昂としてのびのびと快走を続け、ついに63メートルの常磐新記録（全国二位）を物にしてしまったのである。後半は彼らが主役で、私は青息吐息、みんなに担がれてゴールインしたに過ぎなかった。』

親会社の破員らは総勢四八名で、その月間実績は20メートルにも満たなかった。

組夫らの実稼働は、一日平均にして二〇人弱である。その半数が狸掘りしか知らない零細炭坑の溢れ者で、残りは炭坑も立坑も初めてというど素人だ。しかも深度も湧水量も比較にならないほどの不利な条件下での、堂々の63メートルである。一人当たりの仕事量に換算すれば、なんと破員らの数倍にも達したのである。

これら驚くべき数差が、いみじくも崩落事故の不毛性と、同僚を死に追いやった人間たちの浅はかさをおまねく告発している。

いまだら当事者たちに突きつけてもどうにもならないが、人間性も埋没してやまない機械化全盛時代に、これは高々と打ちあげた人間健在ののろしでもあったのである。

またとない弔合戦になった。

しかし、組夫たちは、拍子抜けするほどあっさりしていた。淡々としていた。

四月一日未明、私は坑口座張りで、一番方の入坑キブルを見送り、三月最終日の三番方の昇坑キブルを出迎えた。

一番方の木村先山が、入坑直前、私に、「係長、なんぼ出た、なんぼになんの？」と、心配げに聞いてきた。

「ン、63メートルぐらいかな。よくやったな」

「ふうん、63メートルけえ……。ふうん、そんていいのけえ。係長は、そんていいのけえ？」

「いいも悪いもあつか。御の字だ、大記録だよ。なんにも言うこたあねえ。有難う」

「ふうん、ンだば、いいけんともよう」

苦労性の木村が秋眉を開くと、そばの組夫らも納得したのか、うんうんとうなずきながら、淡々と入坑していった。

ほんとに彼らは淡々としていた。記録なんか二の次で、係長のあんたさえよければそれでいいんだという風情で、むだ口さえ聞かずにすうっと坑内に吸われていった。

替わりに昇坑してきた三番方は、底抜けに明るかった。坑口につかぬうちから「63メートル、63メートル」と、喚声をあげていた。

私の姿を見るや、先山の下河原権太郎が、

「係長、63メートル。こんで良かったべえ」と、呼びかけてきた。

キブルに鈴なりの組夫らも、どうでえと、言わんばかりに鼻をうごめかせていた。

彼らの下半身は禿一本だった。その尻の一つ一つを叩きながら、御苦労さん、御苦労さんとねぎらうと、みんなニヤリと笑い返して風呂場にすっ飛んでいった。

正式に記録を計測した測量係員が、

「こんどは、住友の方も黙ってねえでしょう。こうなりや競争、負けられませぬねえ」と、半ばほめ、半ばけしかけてきた。

「そんなこと、知っちゃいねえよ。あつちはあつち、張り合う気なんかねえよ」

私は、さらりと受け流した。

記録よりは、朝方の組夫らの事もなげな淡泊さが、強烈な印象となつて私の臉から離れなかったのである。

あれは一種の諦め、人も恐れる立坑に流れ流されてきたそれぞれの運命や境遇に、彼らは淡々としているに過ぎないのではないか。それに比べれば、タイムアップ寸前の私の惑乱は何だったのだろうか、内心忸怩たる思いにとらわれて記録達成のほとぼりも冷めていたのである。

負けたと思わない訳にいかなかった。

磁業所長が、とんと姿を見せなくなった。

新記録達成の報告は届いているはずと思うのだが、なんの音沙汰もない。

あれは気紛れの出任せか空手形か、狸親父めと半ば諦めかけた四月半ば、やっと平の料亭「越の家」で豪勢な接待を受けた。

常磐開発の北沢社長と矢部部長のほか、渡辺と下請けの荒木も招かれた。

接待役は恐れ多くも、副所長と保安部長の二重役である。副所長が開口一番、

「やつのことだから、約束どおり飲ませねと後がうるさいからと、所長が言ってたぞ」

と、言い放って高笑いした。

敏専の先輩でもある保安部長が、社長に、

「わしもこの男なら、何かやらかすと思ってたよ。それにしても大した事をしてかしたな」

と、変な褒め方をした。

保安部長は、謹言実直が歩いているような人格者である。その人でさえこうも問題児視していたとすれば、わが評価もきわまったと観念するしかなかった。

記録達成とこの招待を、誰よりも手放して喜んでくれたのは北沢社長だった。

機電のトップ技術者ながら、人情味豊かな明治生まれの硬骨漢である。建設業界に果敢にアタックしていたが、実績と看板が物言う業界では継子扱いで、市場開拓も思うに任せない。それ以上に役員以下

各階層の社員の士気が低迷していて、業績は不振を極めていた。土建屋のわらじははいたものの、親会社以来のサラリーマン意識やマンネリをみんな捨て切れないいたのである。

そのためか、私のような問題児は社風刷新の起爆剤とも映るのだらう。社長は保安部長らに、「彼は唯一のバイオニアで、わが社のドル箱的存在」と、聞いててくすぐったくなるような内輪自慢をしていた。

矢部部長が、嬉々として芸者とふざけ合っていた。移籍時の愁嘆場は何だったのかと首をひねるほど、屈託がないのである。

渡辺と荒木は遊びなれていた。

荒木はこのときとばかり、親会社への二重役に愛想をふりまきながら自己宣伝したが、全く相手にされなかった。というよりは、重役たちは彼を完全に無視していた。

私は朴念仁で、折角の芸者を前にして口もきけず、もっぱら盃と喧嘩していた……。

翌日は、山神祭の休日だった。

家族と勿来から五浦まで海岸沿いに歩き、一年ぶりに一家団らんを楽しんだ。

妻の恵子が、裸足で砂浜を駆けた。

「お母さあん、待ってえ……」

子供らが追ったが、かつての華やかな短距離走者は、振り向きもせず全力疾走した。

平潟港から五浦にかけての浜辺には人影がなく、難破船が一艘、白い砂浜にのめりこんでいた。それ

を背景に、妻がシューベルトの歌曲を立て続けに高唱した。

昔鳴らしたメゾソプラノである。

楚々とした風情が絵になっていた。

初めてみる母親の華麗な変身を、子供たちが口をあけて眩しそうに眺めていた。

6

三月の記録更新後も、快調に月平均50メートルのハイペースで工事は進行していった。

ところが七月初め、北新工業子飼いの坑夫全員が尻割れして北海道に引揚げてしまった。所長荒木の不透明な賃金操作と、搾取的な飯場管理に造反したものである。

残った組夫は、わずか一五人である。

坑口深度は400メートルを超え、最も岩盤がかたくて破岩能率が落ちる石城砂岩層に突入している。三交代係員らの猷身的な穴埋めで辛うじて失速を免れていたが、それをよいことに荒木は、人員補充をサボりにサボっていた。いくら私がせっついてもものらしくらりと逃げて、蛙の面に小便なのである。

どう転んでも、係員や私らの労力奉仕に手抜きはあるまいと踏んでいるのだ。その厚顔無恥さは北新随一の遣り手と言われるだけあって、世間知らずのモグラは歯も立たない。

思えば前半の記録的な実績が、彼の射幸心を煽りすぎたきらいがある。現場はすべて元請けの私任せ

で、棚ぼた式にありがたげこむ訳だからこんなぼろい商売もない。文字どおり濡れ手で粟、元金はとつづくに懐にしまいこんで、お釣りもたんまりある勘定だ。

寝転びたくもなるのだろうが、さらに渡辺の存在が、荒木をこすっからくも、しぶとくもさせていたのである。

ついに私は、正面切って渡辺に、

「業者の独りよがりの経済ペースを、あんたはいつまで放つたらしにしておくんだ！」と、噛みついた。出方いかんでは、破業所長にも噛みつくぞと半ば脅したのである。

彼は打算的な慎重派で、言葉も反応も人よりわざとワントンボずらして、当たり触りのない上手な抜け道を探しているようなところがある。私の苦手なタイプだったが、初めて見せた私の強面に、気が咎めたようだ。

数日後、彼は坑道掘進係の手勢から八名の直轄工員を引き抜き、北新工業に貸与した。

荒木は勞せずして兵隊を儲けたようなもので、いよいよ上げ膳据え膳、目尻を下げて渡辺にすり寄っていた。

幸い、木村ら地元の先山クラスは健在だった。彼らは二人だらうが三人だらうが、稼ぐしかないと悲痛な顔付きで入坑していた。

彼らの健気な姿を見ると、荒木を喜ばせるだけとは分かっている、手を貸さずにはいられなかった。実に遣り切れないが、それはまた組夫たちとの距離をいっそ縮める結果になり、より強固な家族的

な絆を生んだのである。

私は、それら残留組夫らを中心に混成チームを強化、立坑の再建に没頭した。

深度の増大とともに坑内気温も上昇し、立坑の労働条件は厳しさを増す。

坑口下から五安層までの湧水量は一向に減らない。大半は各階梯ウォーターリンクから導水管に集めて流下しているが、ときにはウォーターリンクから溢れて乱れ落ちることも珍しくない。また築壁面の段差からこぼれ落ちる量も、馬鹿にならない。

それら滴水は季節とともに五月雨となり秋雨となり、師走ともなると深さとあいまって、いつ止むとも知れない陰雨となって蕭々^{しやうしやう}と奈落の底に降り籠めた。

組夫らの厚いゴムの合羽は、もうつぎはぎだらけだった。それを揮一本の素肌にとどめてひたすら掘り下がる彼らは、夜の荒海で漁るやんしゅうにも似て悲愴感さえただよっていた。

彼らは昇坑するや、坑口から脱兎のごとく走って休憩所に駆け込む。そして暇さえあれば、赤々と燃えるダルマストーブのそばで、合羽のほころびを丹念につくろっていた。

師走半ば、やっと貫通の瞬間を迎えた。

私のほかには、誰も貫通の経験がない。真下の坑内がどんなものか知らない者も多い。もうすぐだと知るとみんな色めき立って、遮二無二にピックを突き立てた。最後はどうしてもすり鉢状に深くなってしまう。

私は、下請け係員の磯と先山の木村喜彌太の腰に命綱を結び、一番槍をつけさせた。

「抜けた、抜けたぞう！」

その瞬間、すっぱ抜けそうになったピックを必死にわしづかみにして、磯と木村が悲鳴にも似た叫びをあげた。

2メートル四方の穴が、ぼっかりあいた。

熱気でふやけきった木枠の頭が見えた。

と、空気が雨が急にざわめきだして、一陣の風がさあつと穴になだれこんでいった。

雨脚も一斉に算を乱した。もうもうたる陰雨はたちまち横時雨^{よこしぐれ}となって風を追った。みるみるうちに立坑内の霽^{もや}がすうつとかき失せ、600メートルもの闇の上空に、針の穴ほどの坑口がポツンと光って見えた。

真下には暗い坑道がぼそつと延びてきているだけ。その坑道も荒れるに任せて断面が醜く歪んでいく。立坑の水量測定に近くまで測量係が立ち寄るほかは、その坑道に足を踏み入れる者はいない。もちろん、機械騒音などの坑内雑音も届かない。無残に放置されているというヤマの怨念が、呻きともあえぎともなつて闇の空間を充滿していた。

もちろん、出迎え人などいる訳がない。

立坑の貫通は地味なうえにもしめやかで、派手な儀式^{ししき}もなければ、万歳三唱もない。音を立てて出口に雪崩込む風と雨だけが、恨み辛みの遁走曲^{たんのそうきょく}となって、引きも切らず私のそばをすり

抜けていった。

「呪われた立坑」、とまで敬遠された湯長谷立坑である。一度ならず、二度までも放棄説が流れた。そんな陰言に耳を塞ぎながら、あるいは呪いとやらを必死に振りほどきながら、やっとたどりついた終点である。

なんとも重苦しい長丁場だった。屈辱と挫折と、砂を噛むような思いばかり去来して、折角の貫通に心浮くものがない。

雨に打たれながら、私は一人、いつまでも、気が抜けたように坑底に立ち尽くしていた……。

7

立坑開削工事には、坑底で左右に分岐する延長10メートルずつの連接風道の築造も含まれている。大断面の本格的なトンネル工事で、これにはほ二か月もかかる。

風道工事のさなか、渡辺が、今度はとんでもない厄介者を私に押しつけてきた。

名は、安藤茂吉――。

自他ともに、常磐切っの悪と認める体重115キロの巨漢である。「モーヤン」と言えば、地元のやくざどもはおるか警察署でもいい顔だ。渡辺と小学同級生だが、つるりと禿げあがった禿げ頭ときょろとした大目玉が、年齢以上の貫禄と凄味を添えて、いながらにして人をすくみあがらせる。

その茂吉を突然連れてきて、しばらく預かってくれと言いだしたのである。

茂吉は天涯の孤児で、養い親が三度も変わっている。十六歳で坑夫になったが、坑内でも坑外でも喧嘩三昧で手に負えなかったという。そのため横須賀の軍需工場に、徴用工として体よく放逐されてしまったらしい。

彼の生来の粗暴性や不良性からすれば、軍需工場など物の数でもない。逆にそれは悪の温床ともなつて昼は怠け放題、夜ともなれば横浜や川崎などの盛り場まで遠征して乱暴狼籍の限りを尽くしていた。

事あるたび彼は、

「俺は碧城のモーヤン、親分なしの一匹狼」

と、喧嘩仁義を切っていたそうである。

徴兵年齢に達すると会津若松歩兵二九連隊に召集され、すぐ中国に渡っている。厳しい軍律も、戦争末期ではだいたいがゆるんでいたらしい。映画の「兵隊やくざ」を地でいくような、したい放題の乱行を繰り返していたそうだ。「生まれてこのかた、軍隊がいちばん居心地がよかった」と言うから、聞いて呆れるほかない。

だから炭碓に復員したころは、誰も手をつけられないほどの暴れ者になっていた。当時はやくざも群雄割拠の時代で、茂吉のような個性には打ってつけた。彼は水を得た魚のように本領を発揮し、たちまちその世界でも悪名をとどろかせたのである。

そんな茂吉を、常磐の労務軍団が野放しにしておく訳がない。機を見て彼を労務係に抜擢して、フルに利用した。

特に労働組合の混乱期には、その攪乱と懐柔の手先として重宝がった。そして会社好みの労組の素地が固まると、今度は選挙戦の裏面工作の尖兵として使いまくった。そうなるに茂吉は、目はしもきけば悪知恵も相当なもの、いつしか会社や地方政財界の裏表に精通して、地域社会の一種の名士的存在にもなってしまったのである。

活動の間には労務屋の特権も乱用して、長屋の女房たちをつまみ食いしたらしい。

養い親を替えたように、妻を四度も取り替えている。直情径行型で天衣無縫、人を人とも思わぬ粗野な性格が、そのまま女に対しても暴発している。宴席の芸者をいきなり小脇に抱えて隣室に拉致し、人の目も人の耳もあらばこそ、そそくさと用を済ませたというのが語り草になっているほどである。

しかし、労使関係も爛熟すると、裏の裏まで知り尽くされた上層部にすれば、彼の存在は疎ましい以外の何物でもなかったのだろう。選挙戦以外での利用価値もないとして、体よく労務係から坑内運搬係に放逐してしまった。さらに常磐開発が設立されると、その坑道掘進係にさっさと売り飛ばして彼の口も手足も封じ込めてしまったのである。

茂吉にとっては、その坑道掘進係も安住の地でなかったらしい。係長の林も持て余したろうが、それ以上に茂吉が林を毛嫌いして大猿の仲に陥ったという。

そりゃそうだろう。私でさえ、林の顔を見ただけで虫酸が走る。林と茂吉がいみ合う図を想像するとおかしくもなるが、立坑は姥捨て山ではないのである。渡辺も渡辺なら、ついてきた茂吉も茂吉と呆

れるばかりだ。

それにしても大難題だ。

彼とすれちがうことはあったが、言葉を交わしたことがない。これが音に聞くモーヤんかとちらと見るだけで、しかと目を合わせたこともないのである。

ただ一度、彼が運搬主務に伴われて、水抜斜坑の坑内詰所に現れたことがある。彼は、私の主務者方針の大看板を穴のあくほど見つめたあと、じっと私に眼をつけてきた。私はこんな手合いに構っていられないと、素知らぬ振りで目をそらしたのをおぼえていた。

私はぶすつとして、即答を避けていた。

渡辺は、責任は俺が持つからと、茂吉の兄貴分のような口振りで私に持ちかけた。そんな大物ぶった態度が気に食わなかった。

それ以上に、椅子に踏んぞり返って、言う事を聞けとばかり私を睨む茂吉も気に食わない。その両肩には力が入り、ちょっとの身じろぎでも椅子が壊れてしまいそうだった。

「ま、長い事は言わねえ。この立坑が終わるまでいい。ほかの係員並みに扱ってくれりゃいい。モーヤんも、そのつもりだから」

渡辺が、やんわりと下手にできた。

こんなデブが使い物になる訳がない。キブルも占有されかねないのである。

私は預かる気もなく、試すつもりで、

「じゃあ、みんなと坑内なに入って貰うかあ」と、両者に鎌をかけてみた。

茂吉が、大目玉をひんむいた。

今度は私も、ギョロ目に眼をつけた。

のるかそるかか喧嘩見合いだったが、思いも寄らず、茂吉のギョロ目が先にずれた。そればかりか、彼はやおら立ちあがって、

「ようがす。ンでは頼みます。何でもやっから、しばらく草鞋わらじをぬがせておくんなんしょ」と、辞を低くして腰を折ったのである。

蛇蜂取らずになっちゃった。

いかな茂吉でも、立坑には入れまいと踏んで仕掛けたのである。それにしても、草鞋をぬぐとは彼らしくて、恐れ入るほかない。

「いやあ、噂には聞いてたが、出来が違うわい。やっぱり林とは月とスッポンだあ」

茂吉は、禿げ頭を撫であげながら、どっかと椅子に腰を据えた。鬼だるまが布袋ほていさまになったように、彼はがらりと砕けていた。

茂吉が座ると、椅子が土間に根を生やしたようにも見える。賭場の帳場にでも上がりこんだつもりか、草鞋ばかりか振り分け荷物もさっさと投げだした感じである。

噂ほどには無茶苦茶ではなく、茂吉には憎めない所があつた。言われるような悪であるにせよ、丸ごと悪と決めつけるのは早計で、案外筋を通す男ではないのかと思われた。

早速、私は茂吉を連れて入坑した。もちろん彼の巨体に合うゴムの合羽などあるはずがなく、文字どおり合羽からげた股旅姿だ。

名だたる茂吉のご入来に、係員や組夫らがびっくりした。組夫の中には刺青を背負った者が多いが、茂吉は超大物で、場末も場末の立坑に流れてくる玉ではないのである。

しかし、組夫ら以上に、茂吉が大目玉を剝いた。誰が号令するでもなく、整然とよどみなく流れる仕事と組夫らの動きにびっくりしたのである。身じろぎもせず、大きなギョロ目で組夫らの姿をじっくり追っていた。

昇坑するや、茂吉は渡辺に向かって、



坑底の風道坑で炭碓すす男たち。いまでいう3Kのはしりでもあつた

「聞いてはいたがさすがだなや。この連中の仕事は、見てて胸がすくくれえだ。あんでは記録も出っべというもんだ。親方の仕込みなんだっべな。ン、俺はここが気に入った」

と、言い放った。

そうも好かれて長居されたんでは敵わない。

戦力にもならない、目に余る居候なのだ。

私は追い打ちをかけるように、彼を三交代勤務につけた。三交代の辛さ惨めさを知ったら音をあげるだろうと判断したのである。

ところが意外や意外、茂吉が宗旨を変えたように仕事に興味を示しだした。特異なチームワークと私の個性的な職場管理が、強烈なカルチャーショックとなったようである。

とりわけ係員に対する私の作業指示簿に執着して、漁るように勉強しだした。指示簿は組夫らに対する人間的配慮まで添え、図面入りで立坑の工法を説いている。茂吉はじっくりとそれに目を通しながら、頷いたり考えこんだり一人で自問自答しているのである。

また、深夜の立坑事務所一人で自問自答しているのだから物思いにふける姿をしばしば見かけた。

その後ろ姿は弧影悄然としていた。大きな背中には、さんざん利用されてほしいと捨てられた無念さと、日陰者の哀感が滲んでいた。

私は、わざと優しい言葉をかけずに突き離しておいた。茂吉もそうなら、私も含めて立坑の住人は食

み出し人間の集まりである。

特に組夫らは、誰もが尋常一様な道をたどってきたとも思われず、人に言えないどんな素顔を秘めているか分からない。だから私は、

「此処は人生の吹きだまり、後がないと思え」

と引導を渡して、彼らに生き残るための立坑のイロハを叩き込んだのである。

茂吉の中でなんらかの意識革命があって、何か芽生えつつあるのは確かだが、それはあくまで彼自身の問題である。それにいずれは去る人間で、まだまだ組夫らほどには手を貸してやる気にはなれない。

私は複雑な思いで茂吉を眺めてはいたが、立坑や私から何を取り何を捨てるかは、茂吉の勝手次第と放任していた。

8

渡辺が押しつけたのは茂吉だけではない。

五安砂岩層の「止水工事」まで破業所から安易に引き受けてきて、私に預けたのである。

ただの止水工事とは、事情も施工法も全く違う。風道完成後、該区間の坑壁の内側に補強用のコンクリートブロックを内巻きして、薬液注入を再施行するというのである。

坑底から450メートルもの上空での宙吊り作業で、考えただけでも背筋が寒くなる。親会社の破員

なら反拗は必至で、計画もすまい。下請け組夫だと、人命や人間性がいとも簡単に無視されて軽々しく事が運ぶのである。

計画実施の決定を渡辺から告げられたとき私は、啞然として彼を眺めた。湧水を放置すれば、排気立坑として供用後に大きな通気抵抗となるばかりか、扇風機の内部腐蝕を早めると渡辺は大義名文を振りかざした。もっともだが、彼は工事の危険性や困難性に触れようもしない。破業所破務部の指示には逆えないとしても、無難作に言っている無神経さに私は呆れたのである。

しかも前年失敗した薬液注入を、また試みようというのである。結果はどうであれ、防水屋だけは確実に大儲けする。誰がその売り込みを真に向け、誰に吹き込んだかは想像に難くないが、計画の裏側にひそむ灰色の部分を勘繰ると暗然とするばかりである。

昭和三十七年一月二十三日、風道工事が完成し、本来の開削工事はすべて終了した。

着工から二年一か月、崩落と水没の二大事故を含めても月平均25・5メートルの実績は、従来の標準ペースである。前半の親会社の破員らの不振と失点を、後半でいかに挽回したかがよくわかる。

この時点、住友建設側の鹿島第二立坑の月間平均進度は26・3メートルにすぎない。

風道完成後、北新工業の荒木所長は請負契約を解除した。止水工事は彼にとつてなんのメリットもない。そんな危い橋を渡るのはいっ平ご免とばかり、部下の係員だけを連れてさっさと北海道に引き揚げてしまったのである。なり振り構わぬ請負師の現金さと、逃げ足の早さには呆れるばかりだ。

私は、残された磯係員を臨時職員にしたほか、組夫らをそっくり引き受けて常磐開発の直轄工員とした。子会社なるがゆえに「工員」と呼ぶ。親会社の労組や破員らはそう呼び分けて、工員たちを坑夫に限りなく近い存在と見下して主人面をしていたのである。

その労組が湯の岳おろしの空っ風の中で、「石炭安定化」の街頭宣伝を始めていた。

副組合長を団長とする特別アピール隊は、福島県知事の支援を取りついたり、県内全域を隈なく飛び回って窮状を訴えていた。

傲然として四方に睨みをきかしていた「常磐労組」も、ついに手の掌を返したように地域住民や行政におもねりだしたのである。

止水工事は、スカフォードの改造工事が始まった。コンクリートブロックを内巻きするため、上段の床面をそれぞれ60センチずつ断面縮小したのである。

その後、改造スカフォードを五安層の底部に据え、内巻き覆工の基脚部築造に入った。既設本体のコンクリートブロックを抉り取って地山を露出、さらにその地山を掘削して周壁を60センチほど拡張したのである。

宙吊り作業のうえ、スカフォードと本体坑壁との隙間は従来より倍増している。闇の中だから怖がらずにできるといえるが、その闇がともすれば宙吊りだということを忘れさせて体が無防備になりやすい。そのため転落防止の安全対策に工夫を凝らしたほか、作業者の動きを互いにマークするマンツーマン

マンディフェンスを終始徹底させた。

周壁を拡幅後、鋼製セグメントより成る張りだし鋼盤に、フーチング用の特製コンクリートブロックを敷き並べた。

果たして上部50メートルものコンクリートブロックを支え切れるかとなると、崩落事故の釣り天井のように全く心許ない。つまり状況条件はそっくりで、何の因果か最後に同じ業苦をなめる惨めな結果になったのである。

崩落時に比べれば多勢に無勢で、施工も責任も一身に背負わなければならない。昼も夜もなくつきっきりで目を光らせ、二週間でなんとか無事に内巻き工事を終わらせた。

満を持していたのか、防水屋が気負いこんで乗りこんできた。今度はケ・ミイ・ゼクト工法だから一発で決めると、鼻息も荒い。

前回のハイドロック工法は水ガラスを主剤とし、これに重炭酸ソーダとケイ弗化ソーダを添加するものだった。ケ・ミイ・ゼクトは水ガラスをゲル化させる添加剤に、アルミン酸ソーダを使用している。

防水屋たちは、またも初日から湯本の酒場に通いづめだ。葉九層倍がのし歩いているようなもので、物凄くほど羽振りがいい。

だが、またぞろ完敗だった。

地山が新薬液を全く受けつけず、開始早々に防水屋の監督が「こりゃ、駄目だあ」と、哀れな悲鳴をあげてしまったのである。

命がけでお膳立てしたうえ、薬液や器材の搬入、または注入の補助作業もすべて引き受けている。防水屋たちは注入管の取り替えとポンプ運転だけで、上げ膳据え膳の殿様商売なのである。それまでしてやって、駄目だあ、ではこっちの腹の虫がおさまらない。

私は監督の尻を叩き、全注入孔について何度も試行を繰り返した。だが結局は同じ繰り返しで、高圧注入で無理に押し込もうとすると、コンクリートブロックの表面にすぐ亀裂が走ってしまう。全く無駄骨に終わった。

それでも諦め切れず、地山とコンクリートブロック、およびブロック相互間の間隙を対象とする空隙充填に切り替えてみた。

すると、湧水が遂次止まっていった。

俄然、防水屋が生色を取り戻したが、ひと通り終えて立坑下の水量測定結果を聞くと、止水率は50%にも満たない。そんなはずはないとスカフォードを降下してみると、前には全く出ていなかったブロック目地から、湧水が雨あられと噴出していった。

そうなれば乗りかかった船、私は我を忘れて、湧水を追って追って、追いまくった。

シラミ潰しも同じだが、敵もさるもの、逃げて逃げまくっては、思いも寄らぬ所からびゅうっと噴出してくる。まさに神出鬼没で、人間たちをあざけるように弱点や盲点を突いてくるのである。

さながらゲリラ掃討戦のような、実に辛気臭い攻防がえんえんと続いた。その数や範囲は次第に減っていくが、なにしろ相手は深度にはほ相当する水圧いんぱを持っている。追いつめれば追いつめるほど、窮鼠

猫を噛むような猛抵抗を示すのである。

ついには湧水が性悪なのか利口なのか、追う人間が悪か悪者なのか定めがつかなくなって、さすがの私もグロッキーになった。

何よりも、スカフォードの運航に神経をすり減らした。壁面の至る所に注入パイプが突き出ていて、それを一髪之差でかわして上下するのである。かわし切れず何度もスカフォードの縁にひっかけたり、あるいは乗りあげてしまう。その都度スカフォードは大きく傾き、あるいはパイプを折ってガクンとずれ落ちたりする。はらはらのし通しだ。

周壁は薬液にまみれ、ついには注入パイプの突起も見分けがつかないほどになった。

工員らにも神経的な疲れが目立ち、やがてはスカフォードを突起物にひっかける回数が増した。明らかに危険信号である。

私は、止水率が80%に達した段階で見きりをつけ、渡辺に注入中止を進言した。

もはや薬液を浪費するだけだと説いたが、渡辺は聞くものではない。事もなげに、「諦めんのは早い」と、言い放った。

彼は部下たちの心労や生命の危険性より、敷地内に山積している薬液ドラム缶の残り本数ばかり気にしていた。破務部と防水屋のペースに、すっかり合乗りしているのだ。

無然としながらも、私は指示に従った。

結果は同じで、止水率向上の兆しは全く見られなかった。残るは壁体からにじみでる水だけで、薬液

は湧水圧で押し出され、外に垂れ流す量ばかり多いのである。

再度、私は注入打ち切りを進言した。

またも渡辺は、「そう簡単に諦めんよ」と言っていて、見事なしかめっ面を見せた。

私は、また彼の意に従った。結果は同じで部下たちはすっかりバテ気味で、顔も手もかさかさ荒れていた。皮膚に触れると炎症を起こす劇物性の薬液だったのである。

スカフォードも擦り傷だらけ、薬液にまみれて満身創痍だ。

再々度、私は注入の即時中止を頼んだ。

渡辺は、またもや不愛想に拒んだ。

仏の顔も三度、私はもはやこれまでと、

「あんたは、いったい人間をなんだと思ってるんだ？。部下を殺す気か。俺は嫌だ。やるだけの事はやった。あんたの顔も立てた。誰が何んたって俺は降りる。これ以上やりたけりゃ、あんた一人でやったらどうなんだ？」

と、一気にうっ憤をぶちまけた。

常磐に入社以来、初めての命令拒否だ。

渡辺はろくに入坑もせず、いつもストリープの前で股ぐら広げ、防水屋たちがいい顔見せていた。このときもそうだったが、私はミルクまみれの合羽姿で彼の前に立ちまはだかり、憤怒の形相で彼を睨ん

だ。

私のそばでは茂吉が片唾を呑み、私と渡辺を忙しく見比べていた。渡辺がぶすつとして立ちあがり、くるりと背を向け、手を後ろに組んで天井を仰いだ。

「そんなに嫌なら、止めにすつかあ」

思惑はずれた背中が、ぼそっと呟いた。

その背中先の窓越しには、使い残しのドラム缶がずらっと並んでいた。

なんとも往生際が悪くて歯切れも悪いが、言質をとればもうこっちのもの、みんなに知らせろと茂吉に目配せした。

「よしきた、合点だ」

巨体を揺すって、茂吉が外に飛びだした。

「おうい、みんなあ、終わりだ終わりだあ。注入は終わりだあ。撤収だ、撤収だぞう——」

居候にしては、どすをきかせた大声だ。

どんな風の吹きまわしか、茂吉が我が物顔で立坑に根を下ろしてしまった。

9

止水工事の上限位置からの撤収に先立ち、私は真下の闇を部下たちへのぞかせた。

その闇には、放蕩無頼の限りを尽くした人間たちへの、ヤマと水の怨念が籠っている。ただで逃すも

のかと息を殺している。そんな妖気に魅入られて、長くのぞいているとくらくらと目まいさえしてくる。坑口まであとわずか100メートルだが、スカフォードはひと回りもふた回りも小さくなっている。

転落防止のためにもあらためて危機意識を植えつけ、最後の最後まで気を抜くなと発破をかけたのである。スカフォードは内巻き部分を脱すると、急に横揺れの振幅が大きくなり、闇夜の海に浮く木の葉のよ

うに頼りなくなった。

心細さは誰も同じか、四周の縁に立って、バランスをとる工具たちが、一斉にそわそわしだした。手をついてのぼしても、壁に届かないのである。

崩落区間にさしかかるころは、私もそわそわしだした。そこから、この湯長谷立坑との腐れ縁が始まったのである。

あの黒い染みはあるかと、一段、一段、ブロックの壁を目でなぞりだした。

しかし、さしもの染みも、灰汁が抜けたのか風化したのか跡形もなかった。

ほっとする一方では後ろ髪を引かれ、急にスカフォード（吊り足場）の震動が重苦しくなった。

崩落区間をすり抜けた直後、足許から突きあがってくる震動がえも言われぬ震動をともない、私は背筋

が寒くなった。

背中に何かが張りついたようでもあれば、両肩をしっかりと押さえられたようでもあり、ひとりだけで

がこわばってしまった。

坑口が、すぐ頭の上だった。

眩しいばかりの陽光もさしこんでくれば、坑外夫らの話し声もがん響いてくる。私が送る信号もはつきり聞こえるのだ。

スカフォールドの部下たちは活気づいて、騒々しくさえなってきた。

それなのに私だけがこちこち、ついには足がぐくぐくと震えてきた。

必死の思いで、人目を取りつくろった。

そんなにも間近な坑口が、このときほど遠く感じたこともなければ、時間がそんなにまだるっこく感じたこともない。

よれよれになって坑口に這いあがると、そのままへたへたと座りこんでしまった。

奇しくも三周忌の三月二十四日……。

最後の最後まで悪縁に振り回されて、やっと全工事が終了した。

二年前も疲労困憊^{えんぱい}。それ以上に今度も、よれよれ、ふらふらの解放だった。

VI なみだ船

I

親会社の企業合理化が急を告げていた。

石炭鉱業調査団による全国炭鉱の調査が大詰めを迎え、あとは常磐炭鉱を残すのみとなっていたのである。

この調査を終えて、どんな正式答案を政府に提出するのか、業界労使が固唾を呑んでその動向を注視していた。もはや人員整理を含む抜本的な合理化が、調査団の答申案に盛りこまれるのは避けられそうもない。

いよいよ、立坑の早期開設と急速施工が緊急性を帯びてきた。

すでに東部鉱では、初めて通気兼用の運搬立坑、鹿島第二立坑（深度762メートル）に着手しており、住友建設はこれに西ドイツ製の立坑専用捲上機、ボビン捲き（複胴）を導入している。合理化も立坑も、常に東部鉱が一步も二歩も西部鉱に先んじていた。

だが長期的展望では、炭質や炭量、あるいは生産コストなどから西部鉱の大型開発が死活的な急務となっている。そのため俄然、立坑の開削計画が目白押しに打ちだされた。